春色惠花

奪

へ13
2938
2止

門へ13
號2938
巻2

春色恵の花二輯の序

勅なれば上とも曰ふ嘗て窮ふと問
たづいまたつん。紀氏の戈女が古事ハ彼
相国寺ハ美名残して嘗宿梅それ
曾操乃先途の梅ハ口を酸る軍勢の
早即塩梅の匠ハ勅事ハ吉名なり

此書籍ヲ賣却又ハ貸ス人ハ
者アル時ハ直ニ御報知ヲ願ク
澤田安磨

昭和九年
七月九日
購求

梅暦を開版く文永堂が常に吉日
良辰とおもひしまと是有官芸賞人遊
行の袖ゆも推らへらまくしく見南枝の
時風雅はこのきさの香を傳へく方寸
もてこまるに貧本屋衆の軒端の梅暦と
郷穂の賞言そまづ作者の幸福と成く

序ノ一

寂初に裏家中に郷もり塚の傍四に
寳生の麓向今に辰巳の園ようく
輝るいるに寳人とよく前後に編の梅暦
まくも余暇の種を下して六冊とも世睦の
花枝の雪中の寒紅梅色香も深き渓
斎が筆に寳一樹の風眼前と流行

五分も齋ざる新著の魁惠の花由可里
ふかき法縁日の植木もなくて室咲の根ハ
貴重なるを抽を並べ此岸を召ものへ求ら
れんと一向よ秋紙うく願ふ事なん
干時天保六未初冬末陽を信新板ふとて筆を
狂訓亭の東樣ふ採まてる為慢先生東都人

情物の本を流行初一作者の元祖
南仙笑楚満人六年以来改名して中ほ
発行の詮賞家為永春水の雪よ庵ド
此美中でハ初編より初ものと浮き居已
の小庵稲荷横町の南窓ふ

櫻川由次郎謹誌

由三樓

養未の出世補像を
吹く日動み換る
唐琴屋の内藝者
よ孫八

揚家町
唐琴屋の蜆蛤
丹次郎

行路難ふ題を

憂旅の
山ふかく
道ふみぬ
緑の林
ひろぐ
みくまれ

右
清元延津孝

悪漢傳八

小梅の里の女達も
時いくさ移ば
辺鄙ふ流泊

くるまさいとも
いく旅の藝者と
形りしも
ものさ越りて
ふふ藤兵衛と
奇縁の楽
忽然とり

旅唄女於由

春色恵の花二編上之巻

江戸 狂訓亭主人著

第七回

さてもい由が難治の中へ立入る其人ハ弱きをとりけ強を折〻く生質を得る東男千象の義を聚とりのるが実茶より莫の号ゆ〻く始終を不改侍ハが非ざ紅子の嵩惑不便ハ思ひ衣をとりてきりくまとる金をのとりび立く産を滑しく侍ハが悪計を除きとる也

早く尚初を出さんとて〳〵路用もりて不自由させじと残るなく〳〵信切に世話をやきて、中八さて
ありし親父八茂兵衛をふかくこと志りて
信心なる成田山の御利益なりとて成田の方を
拝礼し粗おうとして和尚して今夜八御山に通夜をな
いよ〳〵神徳を顕らんと中ば降来る雨をいとはず
揺の宿を立出て不動尊へと来詣をしてなる程
此夜おうよりをば茂兵衛ば雨天

よりあまり遅参せしことなるをば一日二日八この家に逗留
ちうめるおうよりをもり宿てもそのうちをいひきらせしに
土産のあるじも元来ねんごろ者にて八の要ずくを
をかのして男八居ることなるをば茂兵衛が男意を恨び
実八旅宿代も無人の旅なせぎなるをば宿減ゆく他八この
相違なるをば半なるうなくなるうへ
別ぢんに酒肴をこしらへ茂兵衛をもてなすけるば茂兵
衛も宿〳〵旅義をつうへ〳〵おうよりを相手に酒をばくく

くるぶ敗ふ生目もくまきく兩八次第ふ惜つぐ
き物さくさいん方ゑ世界も高くとりと由を
おくくそづりそのふ三味せんをとりいぐ中八きく
さんふ、きうせ中のハふ彩ごくく内流ぐひきゑヨト去
のびごゑ

清りけのごげんの初昔思性ときくく比絢ぐ
おがろの月や松のうげ日とてやおまくの
政別りうう果報も一森とゑめくまくさの

月の裾ぐハ八初まとるわどぐちゑ春ふ「ひ
の底のきまニ暴くく「志まろくさぐハ「琴ふみ
ト小声ゑぐうもうくくくく鳴の節さく三味せんさくゑう
くく来熟の業ゑうび義ま糸つくく、お由を看ふ田舎
あゑ死のくくせものきまゑうくくしの旅うせぎ蓋も丹田山
綿紬とまぐめハ思ひまどよくゑ又まぐ自然と艶ある
本結城紀けくくくる厚化粧ふあくで素気のうつく
しさどうくくあんゑ蓋人ゑ田舎へうせぎふ出くくやうと

いろ〳〵なまべかりをしかの向へ義「トキニマア」おめ〳〵遠親子ハ
どろ〳〵と田舎へ出てのぞく〳〵おめ〳〵の義理ゑ容儀とのひ
縁会の中あも沢山あい様〳〵藝者何もこざ〳〵まくら
きぐ〳〵出て来ると人でもよさそうなものぐ何で結ぶらふ
居中ひとけでもあてのるゆう女男の身を切ふち地を
たるまと人じやアヨりいろいのぐ出て来たこのうく
世「イエ〳〵どよいてそんなるまでハございません」上
おろさんが藩会でおざいまもろ〳〵唄女でもしてと

おもひ付まり〳〵こなまと義ハうんとうでゆ〳〵衣彩ハできき
ませぬどふも縁会でハ先ても世ゆるゞ主流ごろう主中へ
まぶうろ〳〵出ろまもせん由ゑマア田舎へでもと中て
ちろ〳〵の方へ出て〳〵まあろ〳〵のぐございません義「おろふ
きうあろうきのようといるすぐ彩いろちやアどふせどの
ゆうどゞ城ふおめ〳〵ゞまとゆる結土唄女ハあろ〳〵由びを彩
ろ〳〵ぞる様ハ人へせ何縁田舎へ出るるゆゞるものうチット
まぐうりどゞおいろ〳〵ゞ結土でおめ〳〵ハ近付あろ〳〵元

恩義ハ感ジ不死
赤の縄ニ結ぶ

ゑぶくろを流す主着ふして人せうアうんぞくも
マア強金へうつとうおいくをたづねるぞと通人
めくとうをいふやうぐぐ彰衡ゆも唄女ゆもおそふ迎
づきもあるーまこ友達の座敷をつとめさせても一日月
二金や三金八文でも見へぜ結させるやうぐぐ桜川の由
でる新孝でもおいくぐ知いきの唄女ごとやアまさろ川
向を通る人をとるやうゆやアきへぜ結ッ子どーーぐ
去地をまるまくとんみ訪ぐ必やもくーうのも何のう

縁ぐろふ是非おまぐ一肩いまくやうとうぞんよ
さういくくさゆくー強金へうつるぐトいふまくうまを
しきおりしぐなどふーくとんみ彰毋しの人と武蔵ふ泊
り金ーくー義を退るこのこぐ今より来るのよ
りゆもとさも伝切る男青ふ和まぐくとまこぐ来る
しくおとぐぬるゆといくー歳ういもひるをもと九稲のつを
うくくふ知の方礼まそゆふーー娘青の着まぐーとを
きど臭ぐゆ湯臭をつくをその風情うの義を来るを

ぞんじ知つて居なぞうもそく〳〵〳〵〳〵 後「ぞんじませんこと
やうもなぞサア疲れて体ばかりなせく気をつかうも
やうなぞサア〳〵疲れたく大きな知恵を出せこと
の〳〵 由「アレさいろ〳〵この僕さまのことをあのでハございません
ヨトまこと〳〵涙ぐむ 後「ヨヤ此子ハ泣のう何ぞ言ふこと
さう 由「イヤエどういたしてさうでハございませんが 後「出来た
て何をさぞしてこのぶく〳〵のうく 由「どういたしてく 勿論
あの方〳〵さういふ事でハありませんヨあんまり 後「茶

さんが伝切ふもう〳〵やうこうまこと何ぞ出来く
あつとあぐでぞいまし 後「なぜ人ふ伝切ふさまると腹の
立やうな知れく 由「アレサさうでハどざいませんが是 ぐく
一人もあなたのやうなお方ふ出会ことも中〳〵どもなく
じまして私のやうなこうこう者ハ出ふあのそふ お つき
なさるぐろふと思ひましたとまこと若旦ぐどざいます
ト 越の 良く〳〵 後「眼を見る 眼ハいぐらあく〳〵〳〵
後「眼の底ふ知れて 欲目ぐ見ハさるまぐ

ひとをを今一際とぎきをうけて好みある好みの衣裳を
見せてゝゝバ辰巳ハ名ゝき男女でも初江町の仕来とても
あり〳〵と見ハおよぶべゝらゝバ自然ハゝゝバまづ代ハ
見物ゝゝと絹の中ハ詰ゝる音の一章録
極上あつゝ〳〵織の白七子を庄納戸の紋付ハ
濃め江戸縞模様ハまゞ見物紅白の上絵彩
久根糸ゝく松葉をちゝゝハ縫せ雅号ある
やうでも細密なるやうハをゝゝ庄納戸ハ松
葉の根糸も古風ハ又ゝゝ梅の枝どりも俳
句ゝゝゝゝゝ画工英泉の筆意を移ゝゝ下長ハ
偏面嵐のさゝ形ゝゝゝ古風ハ又ゝ
常ハ花久傷山ハ久糸をつゝゝゝゝ縫を
立縫のごゝゝ縫せゝゝゝゝゝゝ
ゝ星のゝゝゝゝハ雨詩の乱形をもゝ出ひ
させゝゝゝゝゝと流行突つゝゝ輝き
若労も楽ゝゝ思ゝゝゝゝゝゝゝゝ

由〳〵ゆゑを考へもしてふきのぐいろいろ色々〳〵
ふさぶハ赤白〳〵ゞ今とんざうをんをうんぐ〳〵大きゝ若芽
をしゝまつサハ〳〵ト笑へどもおとしハ何由色ゝかりしき
もぢのコトゝ稲バコゞうのことも舞ふうり由〳〵ヤうん
ぞ、ちさげもこゝろさることゞざいまし〳〵子へトもこと
奥を赤く赤ゝもの正色ゝる公根をおもへどいらぶやう
〳〵ゝり花〳〵ナニ〳〵そんなことゞハ白〳〵うるゝばゝるく
おもひなさんか実ハ不形ゞざゞおめの前の上を老や

角と思ふ所ゝゝどふぞ結ちへ牧ゝゝ一さん立流ゞ押
出〳〵てゆんやと業ら白ゝく不ゝ公根ゝゝゝ
ごゝゝを考へ出〳〵このヨト表ゝふのこゝおびまでのむゝざん
ゝゝハいゝゝ〳〵ゝ
ゝ白〳〵ゝて
ゝゝ〳〵ゝとわゞまゞゞ不形〳〵を出ゝ知ゝきゝ思
めゝ〳〵ゝゞさゝゝ〳〵ゝ〳〵ゝりゞゞ迷惑ゝゝ白〳〵風と
ゝゝゝゝ根ゝゝぎゝ世話をゝる舞性も
時ゝゝりけりさの〳〵ゝゝ〳〵ゝ思ひゝゝゝゝ
どふぞこのゝえゝ見ゝゝゝゝ

そのうりでありてその出外門ごぜんにねじまげとぶ
指縄かよびぬ程ひざうり程うるまをヨトふく
その家を和らいく内場ホ幸兵の云まへ〳〵義兵衛
まへ〳〵うるゆく義兵衛又うけへどうきゑん女娘と男八の
外ホかとうきの正面着ご今のとりのかたへ出やる
ことごとまご家内ホ婦雪居もものふぬ代義兵衛で
もゆく〳〵宅〳〵もいまとうふをもつまりごとおの
うどどごく小いきる察をとをくて〳〵工ろんとうご
ごぐいまとうく〳〵トまホうまてく〳〵をを食ものいご
義兵衛のそぐく近よまばそのあををとうく義兵衛八二おご
おわごのことでもゆくハナト〳〵雪ら見てく和ら〳〵く
〳〵アアレ○チョントホの張てまとうり後ハ梅おとその
三度んホ〳〵〳〵〳〵あり

第八回

京町の横通ひろり揚屋町その表菜屋の桑の方に
うかことこそ八里八ろう里吉ろの男義兵衛の住居とゆく

て三四人ちらく俄の舞古の舞●「ごとごとものの奴ど
ぞめくとふらうを蓋のう▲「中ぞく底つけうを
つきぶ絵師てんがどろこの●「ヨイ〳〵ことハさてあれハ
きて▲「ちのつく〳〵●「ことハ性ぞんじ栗原の曲舞×「ゑど
ゐ砂糖も雪太白きるもあんを一粒あり●「ゑもんを
つくろの大門口■「ちんな産愛やる史の麻さて書橋ハ
祝ぞふけく×「ふけくちハ打くまいあんもふせ●「つい
ちう書るこのもあるく▲「とこハ性ぞんじ名代〳〵ハ

ちさびまてと拝をあげ生ぞ●「サカく〳〵のうちちこと身を
ゐちくやうちぞ▲「マアまこと体こ稼くおもをふる
つくやりこどぞ●「ゐちいこぞるちりちろふ×「くまさ
ぞくゆもこちぞ▲「そりやアいくがらアゐ堀までちちろ
と性く ゐ白くやアゐちう稼く●「そりやこそちろく逃
生ぞ赤垂を白ぞ、やまこのおの客待合もくぞうしひ
ものぞ▲「ナニ〳〵さうぞやアゐ稼く今見●「延徳賀さん
前の月ざうひとこせくろのうち▲「ゐん寿さうでゐ点少し

内用がのうて ×「へこ」うらいよりうらんぜ
▲「ナゼ」 ×「世用」うらは世用もかうでとて ●「うは大うて
のう 春う 拾うもる 尚がのうざ ▲「コウ」 そうわど 出さて
うでは 極ぜ ×「酒」ゆも女中 ひり もる男ど ●「トの
お 座敷の 酒はらやどろう ●「そりやア 智てとよ ▲「そも
ろ、酒は 光も角も女は 向からうもつ 来ろうとう
も 論方うふ ●「ふとづの ゆも やうもの ▲「ち ょう
てもうん ろ、おらうアふどんさう 号 毎 何の 関係でこんみ

かの沢山の場所へ 来てうとつ くくとさど 時がある也
●「その女沢山の中で 父が 出来 ろ ろうよりく ひりの男ど
▲「エ」よく 他の 英雄をくどく ぜ 高人の 中ふ 居てさく 女が
うる也へのふ女どうの 中へ さつて うるさくつて く ×「モウ
くるるく とらまるどうふ 出来もて ▲「ヘン」おり人
じやアあるめ トらいひうどう 陸子の 外へ 良を ー て 追次
を 見てうーど ▲「ヨヤく」 高りへ おつりきる ちどうう ぜ
○エコウおらうど 知らう 極へ 女は この 廊中へ 見へ さどど ●「そりや

そこらちらと障子の外へ面を出すと変わる女の子
をいハアそんなゆるぎつきてくのう ▲イヤ ちらしいて女ごぜ
眼つきのやきんご ×ちるのちゑんとしてい ■ちゑのうらゆう
しい ●ちりえのきたいみ ×髪の毛のさらでつとやうも
●三味の角をふりくて ●火燵をあくいちをうしさ ■サア
くつまう稽古をいハふしてけいこをしい稽古 ▲イヤ
ぢうどんどやアあくいう曇着ごまづけんぢんふわのくとか
いう女ハ稽ぜ大うと辰巳とうふ ×イヤ ちらうちうとちるとあく

●稽ごろうぜ ×うるわど猫の縁ハちるとあくの ●ふん
と遠さ、ちるあく ■ちごろ〳〵いうらげんふちるあく ▲ちるとあ
どやアあくあんまりいう女で変ゆちるの ●今ウちるとさ
〳〵唐琴屋の内噪女どろうのまご年のいうあく義理ら
しい新の女ごぜ ▲ちうヨ〳〵まとちふ話ぶんの稽く女ご
が隣の家へうゆ〳〵ふ事ちうふ ■ハン変ぐふまいう
風ふる口をきのてる世間の完ハさごうまあくおいうふその女
の好男まで新つく養ぜ ▲サアく〳〵そまハ知り稽でる

情人
會
私語
迷

いろ〳〵モウチツトけいこをやらせるぞや　アあくら　さうヨ
〳〵　モウ日限ぐあるまいとうきげせいこうの極
がせいこう。そなたでもうせう極日やア男ひやうまるぞ×
ちやもそこ〳〵もできめへ　ちめへのえとまるぞ
まぜる種をまく〳〵のうサア〳〵車梅ぐ〳〵ト
つきうる粟もちのけいこのさうぎ賑やうるそなひき
久隣の二階ちんとうーさうさーもうひ家内の人ぐ
せーまうちかの唐琴屋の栄八男のひざふとうかく〳〵

親をおさへ〳〵もそこ〳〵うぶき　アいをのでまて
せうるふさのまはハトのひぐらう丹次郎の奥をアそぐう
栄　ヨヤおそちん酒をいあぐりう丹　そうきろ　つまんうく
屋のふるぐるりのうちいとだうつまう奥のものを見
てもうく一人ぐ惣ぐ三ッ男のんぐナセどんそぐ
栄　ナアニ親ぐあるいうサ丹　あんまり又ぐいどやア極う
おいうアモウ〳〵ろめうと男つと　そこどうてつちきる親み
〳〵ぎまうとこくッてうるいうとと義さんを大門まぐ

おくり出して来まつく来るのとうろう　丹　ゐしろ川
岩のろ　米　ナアニ津波さんハ試しじゃア近所ホウ宅ゆう
うろうろ人が出て来てさッぱりとうちハ来るさいませんハ
丹　さうそもホーしても長うと　米　そもどもどうも
おものゆうゆハ今りませんハ子おいらんハ今夜アあんまホ
ちあつくいうもんざうきげんをうくうくして来ふ
とうろうとうろうもんざうう新造衆や何うを大勢
つけくとうろうとものを貴尾よくおくりやしうち志

まいうのとまつご何ごの角ごのとうろうどん
ゐふ書をのとまつくうろふ場見くいうもんなさいまへ
丹　そくく出くく来る時鬼王東ハ内所ホ居ろう　米　ア
ゆまくくよそ見でが私きやア義さんホつのくやでうろ
いうが　丹　ナニおいうアおッうさんの
用で出てんざうまご物うう見とおもうくぬうう
いうのサそくてこんあハ宅へけッうう　米　アけうり
まくくうが私きやアすまご仲町ホ居る法のりホさう

のうさく　ぢうさうよいヨ　丹　さうさんなうらいト
ほうふうる　米　ちうしさうりぐらんすがうさく　居すど
ろふとおもうさまたふ遠へゆくうさがまたろうく
えるとうましひめへトのバ丹次郎ハめうとり　笑ひ
丹　さうぐぢ今野へまたふぢうりちさッけうふ
米　アまへまたふまたしのるぐづけめへ　丹　ないい
らアよやおめへが岡ふ藤ち居ぢうとハおうめへ
ううめうぐ釜をうけさ侵ぐおいさのをかさづけふ

いう　雑ふとおうさうちうふとものうさう居ちうくッイ
米　ヲヤッイもよいめへッイハ私きがりのこそぐハまへ
丹　うんのかいうがそいうさのるちうぐよゥく
藤ちうなぐでやアめへう　米　うをぢッうりふちうめへ
おまえんの裾をおさへうふ不承知をしてうう
丹　そまでどうしさ　米　そまううあのゥ　丹　あのも
雑へのんどアいらうがをぢへ　雑ちうふ長さんがくる
とるいのおうさまんが来るとうはめへのうう

ゆげとうをいつさどやァ移くら　栄一ナニゆげ口上をば
いつものう稲くそまでもろうさものヲまとろふ一
見ちぐひぐ子いかまちんが出くいかぞぐとかふと
まぐふかい幸どんが　こまくものしよのとうろう　まのつくまろう
びつくりまくハ子　丹一ナニかいくアまぐふ影へ
いつくまろうくよんつくあまハりんか男へも
つうるうくおめくハよレどろうーぐろふトぐら
つくり居ム

二編巻之上終

春色恵の花二編巻之中

江戸　狂訓亭主人著

第九回

栄一アレまくそんみ勝ひとぐろう新やアまくお
まちんこそとんど訴ふ稲くり居て男へもつう稲へう
さの見ふあうくとお男ひぐろふと逃ぐくんん居ま
こハ丹一ゆぜまくと関ふ稲くんぐ栄一ナニめうぐうう少くも
稲ぐふ表ぐーまくふ居くさんぐろう様ふ稲くうひ

のゐ子奥へ参て痛さとそうぐ者とのけ申いう
おりゝどんゐ（女中のことゝ）そうりめ（そうりめ）湯を高まゐ時分ゐ
都てゝんをとりつく奥へ痛さのサとてゞ初身ゐ
お長さんが何ら用をさゝゐ事ハ喜度お茶さんゝと
男ゝそうとゝゝゝお長さんゞゝ城ゐおゝゝさうゝ
さヨ是者よゥく似てゝゝゝゞ子喜度お長さんハおまえ
んの事似をゝゝ歩行のゞゝゐとおもゝゝ帝ゝゐ
ゝゝ丹次郎ハ事ゝゝ丹まゝそんゐゞゝ絡くをゝのヨ

栄さうハゐゐのゝお長さんもうゐそゐさ絡くんゞく
てゝゝと私ゞゐりのゝゝ喜度ゝ苦労ゐ事ハ
トをゝゝゐさゞ丹ゐゐゞゐのゝ栄ゐゞとゝゝく
中さんもゝゝ喜ゞ奥へゞゝ世絡ハ私者ア除めんゞ
と思ゐとゐゞをゝゝゐ事ハトゝゝゝ丹ゐんの又
つゝゝ絡をゝゐヨ時絡とゝゝ訪ゞおゝゝんもあの
通りゞゝゝゝゝ居ゝゝんゞゝゝゐこのゞゝゐ
疲ゞゝをゐ鳥ゞゐ私ハあの通りゝどの世話

終家内ふゝものとうぐみこと日ゆやアおいうアマア
ゆゝものとおゆつと居るのサ　栄　エト　栄八ぢうくりせ
ー　栄　ヨヤおまそん郎といつと家内ゆやア
居ないのこく　丹　さうヨ　栄　うまぜく　うまぜそんなるゆ　をおを
うそうんぢ。エ丹えさん　丹　ナアニサ今のてことじやアヨく
けまどゝ。そーくおいうぐめ稼くけりやア郎くいう
じやアヨう　栄八ちき　栄　うめぐいく　丹　ハテおめくゆ
あく　逢ぐといつてもマアおめくさく苦労しく宅を出くくヨ

きくもまぐおいうくの出くうふまぐきをヨくでもいと
いふせうるものぐマアさうもうめくぐおいうさんのぶうく
病ひがわんとうふ言ふうるヨ　栄　そりやアさうごけまど
ものこうぐあつくおせそんが家内ゆ居ヨくやうふ
あつこうぐ稼をアマアどふせふヨくうんぢ逢のふあひい
といつこうてもゆ今ゆ苦労ゆ高ぐくも朝晩マア稼を見
て居く一家内ふくくーくく居くうう高ゆつくぐくも
うまーひるゆもうくまどゝ一家ゆ居くヨくやうふうつ

ゝゝどのせふと墨紙を出ゝく流をとゝく　丹　あんの涙
ことゝがあるものゝ今まぐれふ　うさんが配でまるやうど
アゝあんぎのゝりいことを言やゝくこまどがうゝと語
あの亀ゝ　サアモウいやアね　丹　そまどゝてもおうこさんのお
とゝ若旦那ゝ　おまさんのゝ　おまゝゝ
そゝゝゝさうでもあゝゝ　ゝだりお長さんもつまゝく
おまどゝ　丹次郎ハ　丹　まゝお長ゝことゝ言まゝゝさも
んどありやアまけん人子どもどアねサアもういぎやア

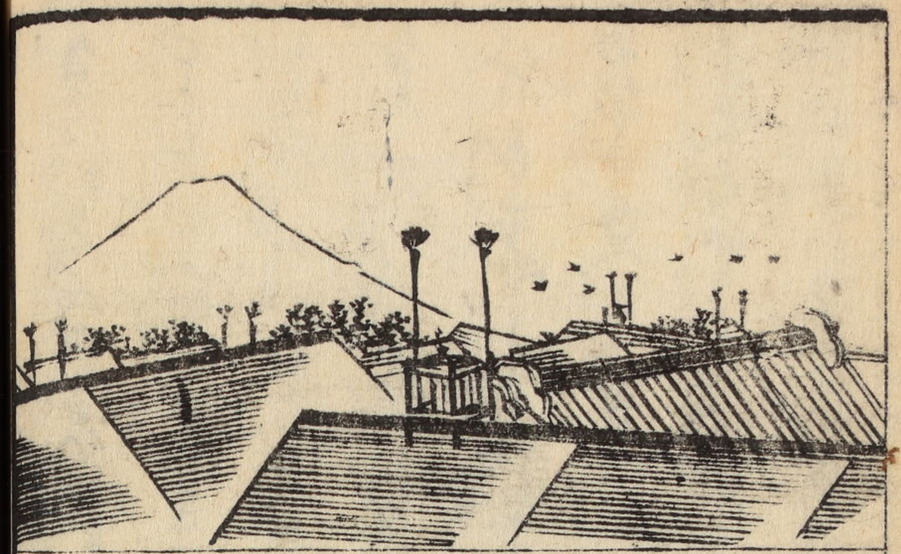
話ゝ　丹　あんが子どもどゝてもおまさんのらひあげを
ものゝゝ子どもなあるも女房きどりゝいるさいまし
丹　まゝごいゝゝ居るのゝ　きどりふゝてもゝ
お主せん人なのちゝ　あけりやアいゝどやアあゝナ　丹　いゝく
おまさんさんも大きふなのちゝありましたものヲ　丹　モウ
いふ言ん人ナ言ッこいトいふゝちゝと実ゝ
ゝゝ笑ゝゝる　丹　ゝちさのゝゝこのを今ゝ
おゝきゝ言ゝゝゝく　丹　ゝゝ言ゝく　丹　ゝ言次を実

丹次郎
お孝八
意情を
こまやう

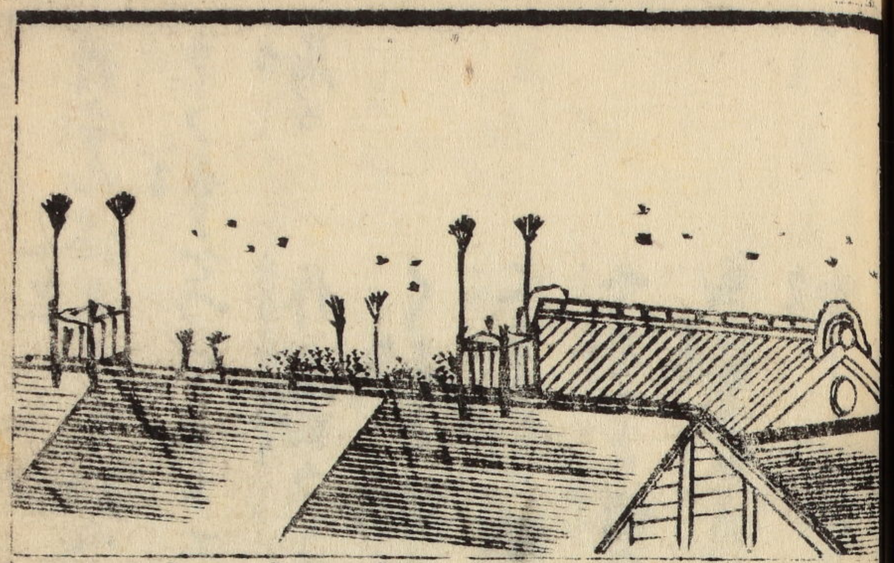
延蔦

屋の声　奥　たとふあるびぐござい奥座へようしう
奥座びぐございトこの商人の聲丹次郎ダ掛ふあるう
丹　なんのあつこいもよくなるアおいつダ何の角の
このへと逃てごろうもふ　栄　アレまさおさんそうそだろ
うり何時ぞ逃ごろうさ　サアおいひなこいよ何月の何
日逃まーと　丹　いの女でもゆげごるどやアあ人らさき
ゆううんごろう稼ことごとりいろく居おいーアゆう
おとくなアナモウくおいーアけうぞ　栄　アそん

なまうんなさいヨおまナくそゆげごろうくそんな
ことをいの藤ふおきうてくトいひるごうちよいと森
ごろぶ　丹　ハおいーアふぞん女ふまると男ろく　栄　ヨヤ
なんぞく　丹　ヤやくらちをあけくごるうーサトいへバ栄
八八女ごゆくくを杯起くく　栄　よウくいろくなるゆをお
いひぞ女くそんなうしくく居ゆうトまる　丹　どう
して居ゆうと　栄　うーしてゆ居るのサトまりめぐ居
丹次郎ハまーひなうぐう　丹　ドレどうくく居るト珍の



ところ人をうけくもりの森
うを栄八ハうまーけまでも笑
ひも せば 貞ゆふ あり 栄 上ウく
人をあのうりんざりおしど
自人ふてらーひ 丹 十二ゆてう
しひ自ぜそんをばいうぶ宅
ふ居自人といてらいろくる
ちをいろく浄さのごあ已りん



の戦理いっぺんう 栄 アレモウりん
ちうふ丹さんハ去地をつらく
ヨちきふてまうせるのごみそん
みるうちりいろくりんちうふ
今内ふ居るい者でもありやア
きるひのく工丹さんうまく転を
ざるしうく半ー接く おまちんグ
家内ふ居自の日ふハどうせふ自人

丹さん 遠慮〳〵もいとまをこうりいてゝゝゝこと
〳〵音をつけるゝゝ工丹さんト 涙をふいてうつむいて
居る

作者曰くのごとくこけもあきことをくど
く言く注ゝゝ申せどもまるで情人のなかふ
てゝゝ理屈も洋義もあきものゝ有り他目
でえると何のこともあきこゝろやゝこゝひるな
き筋がきの対不ゝ有りてハゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝ若勞をもるゞ来ゝゝ

扨義長家のまづ是ゆゝ唄をうゝふ子どもの声

上畳

あゝばうふ又ゝゝ居ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ちゝゝばあゝぬゞさまゝゝ

米

うゝハ毎日又ゝ居ても宅ドやアおゝうゞんもい
ハまいと思ふとまゝゝゝゝゝゝゝハ丹

そんな

らばまぜゆゝゝゝゝゝゝゝゝ

米

アレサおまゝゝゝゝゝ

いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝハアノトまゝ

丹

ハ笑ひうゞゝ

丹

アノと斗り

でハコロ〳〵袖〳〵アノまんざ 栄 「モウ〳〵まんざらこてらふ
ものの中ハ中〳〵アコロきゆやアハ〳〵ものヲト 伺 栄
ろもどろ〳〵きやうきやうより 丹 「そもこでもゆてらしよいとハ
いるじやアあ〳〵ト いろこより きづ〳〵こゑきふ ゆゑ〳〵ぞ
よ〳〵きけバ 栄 八の声 栄 「アレサマアトいつこと ふ
あつこりコロふまづ〳〵 丹 「まんざるおらアーな 栄 「それ
でもひれ人が居るそふぐ〳〵こゑやーどろうぐをるろころ
ぐろひざあ〳〵 丹 「そもこでろ〳〵いやら 栄 「アレまさこんな

こと を 丹 「そもこ火入の中へ細茅のさまざ 栄 「アレサ
そんなふハうちゆてもまる亜ゑ子へ 丹 「そもこざろても
二階ぐきゐッくをこいとるるとコろいやアゐ 栄 「ヲヤ
いゆざあ〳〵 丹 「いゆざといつても きろこぐ袖〳〵トいふ杉
しもとこり衰の方ゆく清元をさろふ娘の磬
強ごーふ耳をつろぬ〳〵きろもこげ しき車引
五緒車引蔵袖褄
上ろり 「いろうあらそふるゑ引さこのきぐん

うゐんのりとうわハさくらゐる目

もと下畧

栄ヲヤまゞおまさんのうわハあらい白人 丹おめ人

のうわハさくらのうゞ 栄アレサ

上りあゞふを稼る松の色

丹モウいうげんふを稼白人 栄アレマアおまちとうふ

のふをつゝあいういまゐの半紙ハ墨繻子ハ口るい 稼人

第十回

昼の世界の実をいゝぐ婦の裏の粉物ゆく故人

山東庵の筆意ふ恥で形義の流行ハうゐまどる

姿ハうゐゐ廊の風情看官よろ〳〵く案〳〵ふを人

とゝふ唐琴屋のおいうん式糸ハむらさ紀山まゆの肌

付を二枝ゑく庄納戸天鵞絨と赤国織の接合せの

平ぐけをきゞうゐく結び庄納戸山まゆの袴を三ツ羽

をうゝちよいと褄をとり階子をゞゝ下りて来く

上畳敷をぬぎいまゝ掃除もせざるきたこの意所の
廊下を平手にて襷をかけ平ゞけの解うるのを
ぬ〜〜〜

お安どんおまへハもうおまつりう　安／ナニ私高やアお家
どんがまつてゐまするマアおまへさんおまつんな
さへヨそーく私やアあの内儀をちらへくと上ケ
まするう　長／アヽアノお安どん私しがおきて来る時子
おりなさんがけつこハ少しなのちがよいうう内証へ出く
えてふとおいでぐろけ　安／ヨヤさうでぐいまするそれ
じやアマアお供中く内儀を招をもつてまゐりませふト
いひるがうえちらせし内証を片付く居ると丹

次郎ハ神棚を拜をて高ひ内証の次の居る佛
多へまつりるがう　丹／お長どうやおッかさんのおまんま
をちらへさせるよ　長／ハイ只今。アノ今お安どんが
ちらへ取りまするヨそーくおッかさんハ今帰ハあい
例へ出くおあゲんなるとサ　丹／さうなそれハいくの
そりでもマアおまんまハ毎日のとおり和らうの方がい
うう別ふちらへさせく亟なヨトいひ付く仏壇へ
おがみふうる　長／お安どんそれでもマア私ハ湯へまつる

「ハイ」ようこそうでございます。あなたのつくおまひみ
さいヨ今わまこと兎ぢいが咽りまをヨ長「アレそんなこと
をいいひぐるいるいるいるいるだろう」安「ハ」二ちまいまをものう
あきめく奴ありふ性といつも毎日毎日出でくるぐきろと関ひ
ものく所へでも性のごろふ奇陸ろ茶爺ど「ト」支配人の
噂をいふその中お長八俗衣を着くる湯場へ行く栄八八
湯より上りゆくこの侵ゆくく化粧をしくく居ると「お長ハ
この茶を通りうぐう長「ヲヤ」栄さん風呂をおひきぐ

ヨトトりくバ栄八八栄「あのりぐふ今長湯をしくう
あくくくくくりませんヨおまへさん今まいりく久旅
湯ぐありまをヨまゆくおまちり長「ハイきうくト湯へ
まいりふあけバ引遠くく日差の者森助表「栄八さん
茶さんの方へ行くくおんるさいます」栄「アイ今ちまと
ごごらくをしてりヨ茶を湯くくおくを表「ハイ
お早くトいひるぐうつせの方へゆくく内所ゆくふ丹次郎
まくく変を言くくて丹「栄八さん茶さんの方へ出るヨ

情夫は沈く
妓楼は居續も

米
ハイトいろ〳〵ぢろり器のを長形く新家の次の
るより丹次郎の臭をちよへと又〳〵 米 まわりまし
ヨト小智ぢく〳〵ふ丹次郎も傍を又〳〵ぢろ 丹 ヲイトえ返
るを志るぢろ線香を志るこで一志の同差もおわき人
間の冥の中男ひハ泥き意情なるぐ〳〵 さて又表二階めハ
代来の客義来居樓けと又〳〵本るのまんじくち
よへと勝をうけ来ぬりふ金屏絵をも〳〵 大きるるさん
ぢろ〳〵臭をうけ楊枝をつろ〳〵居る中のるめハ

番頭新造皇面火鉢の大きるのを二ツるぐ〳〵表
方の灰をき見へゆ〳〵て樣炭をつぎるぐ〳〵 ぢん 山里
さん本るの火鉢を入〳〵ひくんぐんし〳〵次の
るの火鉢へる 沢山炭をつぐ〳〵 銅壺の湯ぢろめて
ちいく〳〵ぐんぐんしョさんな差砂や義さんのうぐひ業
極をもつ〳〵徒ぢろョきり〳〵 河付〳〵ちまやヨトしひハ
ぐ〳〵中のるの火鉢を中〳〵 ぢん 山里さんサア河方
引〳〵ちいくんぐんし〳〵 山里八二ぢん山ぢんさんるの底のるをのるぢろ〳〵河づけ

[illegible]

茂「この火鉢をこく〳〵まるくまるくなるまで大きくぶぎを丸

このゝト笑ひまぐら居る　ヨヤ茂さん蒲団の上ないを

んえんしる　茂「ナアニかいらア聖良の梅牛しのふ通り

匂ハきこのぐサア〳〵酒ふまちよふどやア鬼ヨヤさう

ざぶらそまぐやア蒲団をあげくきまこのふまちよふ

じやアあませんら　茂「さうヨ〳〵さうしく〳〵ゆらくふ

今ふまと来社ゞ来ると大さんぶぎぐらう　ヨ「とんな茂ぶや

吉三郎どんを早くゆんぐ来く床をあげさせや

そして吉野ハどうしこのヲ猫ふ〳〵ぐいよウトしハ

ぐらう次の男人ヨヤ　ヨ「ヤざきぐやアおいらんの伺の

男ふ湯ちうよりく来さッしうえうぐのの水ハあり

まぶく〳〵かいらんの茂ハ　ヨ「アイの面上ちく来まし

とヨ和もあまぶぐ子茂さんく　ヨ「茂さんハ子今揚枝

をきつく志まんまちとぶぐりざまぶヨマアちやく

ぐらく〳〵をしく志まひあんしヨ　ヨ「さうざまぶら

私きやアのうまッきざんもヨ　栄さんハ来イしさうく
イ　エまざざまハヨ　何をしく居るざろく内所の兵
ざりつそざろく　これハ丹次郎の　アレサそんなことを
おいハるんもヨ　何ざろもやア　ちもせんハ子。マアちよッ
とサト　仕里の耳ふ口をとせ　子。子ト　何う唄く
こまハ栄八と義兄と見けもあるやうふ思
りくこのもやく　みるく仕糸が兼く栄八
この初会せとちざく
子　そもさざろうあ且りやアその方があやしう
ざんもアなもんざうハきをつぎく　ヨヤく　さうざん
そいろもそあうをハきハく
もろ私きやアうッりざまハ子ちッとる事がつきまし
せんヨマアく　アレサもさそんなことをいつちやア
つるうざんもヨ　ナアニそんなことをトいふうちの
あけく栄八　おいらんトいつさざりふ三居ると
ヤざうく　シざよ栄さん何をしく居るざろく
そんなふつくらぶとまいくよ　早く来るまく　マア

ろろく　きのうのヨ　栄
ろんかさうでございます
さッけまでさのくノも　ちるい中わ　ちりうるとくハおり
ハ子ト　ハひ　ぞうぞうぼうとたろろくおいらんのきう　栄
ぞのそばくもりるひもくまるも　マア
いよいよ　ちゑくゑさん　ゑ　ハ　ハ　ハ

ごぜいまいらく〳〵ト大きなこえでひうぐう　茂「サアうんハ
いのこゝろ〳〵ゆるしてみる
どうぐゞマアちよいとそでめうふぐやア福へうの　茶「きやう
さ子　氏「サアもう出来まし〳〵よとをマアをとく出し〳〵
ませふトこゝのてうあ〳〵のぜんへいろ〳〵のやさいのうぐ〳〵　氏「そう
いぐまちのをりうう下より新のものをもちまし
るゆう来まし〳〵ショヤ下ゑ〳〵岩音どんちようと蒲
うん出をあげ〳〵性〳〵うんみョ言葉どんハどふ〳〵ゝう
ト茶「よづるいョウ　光「ハイ新〳〵ゞあげませふらま吉
茶「ハトの新をとんぐりまいトいひうぐう
りんまの新

ゞをちよいと扇ひろうけく一まいづゝ次のゞの　氏「こんゝ氏茂
ゆぐ〳〵ゞの世ゝ氏里ハつぎのゞのゝ〳〵むりひく
さんてもぐまでも幕来をもつく〳〵来くちよいとまん
じくあまとの別をとゞ〳〵ゞ茂さんハきまこの好
であゝッ吉ゞゝゝ　茂「そのゞ〳〵ヤレ〳〵ゞゝ方ゞ
付〳〵義吉〳〵来ゝゝまるゞふゝ。ヨイ〳〵光吉
ごゝゝぎ性吉儀ゝぐ〳〵ちよいと揚屋町ゞぐ性〳〵来〳〵下ッし
光「ヘイ〳〵どこ〳〵ゞまりまし　茂「アノ秀吉変をとんぐ
来〳〵ゞ世〳〵　光「ヘイ〳〵ト立あゝる別へおいうん

次の巻より本巻に入る

春色恵の花二編巻之中終

春色恵の花二編巻之下

江戸　狂訓亭主人著

第十一回

湯より上りて十分に粧ひ〻〻仏壇のうら〻〻さ
き妃も小町も百に競べく看ときは古風と唐の彩
どり及ばぬ〻〻仏壇に一座ふ〻〻ぶる
色ハ茶ハをもつて対するのうつい
でに例の例へなんで美味のものを沢山いひ付く来て

ざ
ア せ へ 者 ヘイ こ ま り ま し と 義 ヨイ く 大 牧 く

こ ま ハ お い ら ん こ の 糸 ホ ま ん で う め く も の を 好 ん で や う 食 う 栄
い ふ こ と ぐ ち 言 ま そ い ふ と ま ん で う め く も の を 好 ん で や う 食 う 栄

こ う ま ま ん で さ う 言 こ く や っ ッ し 紙 ヨ ち き や ア 眼 義
あ ん ま

余 り う る ぎ を た ど こ せ へ ッ 密 こ 言 ど ー こ く う り イ せ ん ハ
義 ヘ ハ こ く う る ぎ を 喰 こ く き む け ど ー し も 高 へ で ど う 食 へ

こ と を い ど ぜ ま ん で 温 寺 の も る も の を さ う い ろ て 言 ど
い こ じ や ア 食 う 栄 こ う ハ 仏 ど の 早 く も ち く 食 う
栄 ヘ ま こ こ ー ハ ち ち り い ろ め 紙 ま ん ハ 玉 子 む し

ざ ア 言 ハ 計 量 ヘ ア く き ろ と き う う ざ ん も ヨ 義 ヘ ま ま で ア や
ぐ い や 喧 女 が 主 く ど ろ ふ 紙 ヘ う ど ぜ へ 義 ヘ ナ ニ 長 ど や ち よ も ん
ち う こ を 主 を 沢 山 ゆ ー こ く 郊 ち ふ 味 の も を ま ま ー く
へ 主 ち と き う 言 て こ ん る こ と ー く 秀 吉 史 ホ 早 く く ヨ
者 ヘ イ く ー か ー こ を う ま ー く と 生 く ー く 紙 義 ハ 義 ヘ 秀
さ ん ホ お い ら ん ど ぐ 早 や ア く く 寸 る と お そ い と 馬 く 馬 と
い ホ 字 を 書 こ く や る と い ち こ く こ ん る ヨ ウ 里 ヨ ヤ あ ん る
こ で ど う 白 へ こ と を い ハ ッ 言 る よ う る と ま ホ 字 ど や ア ら け

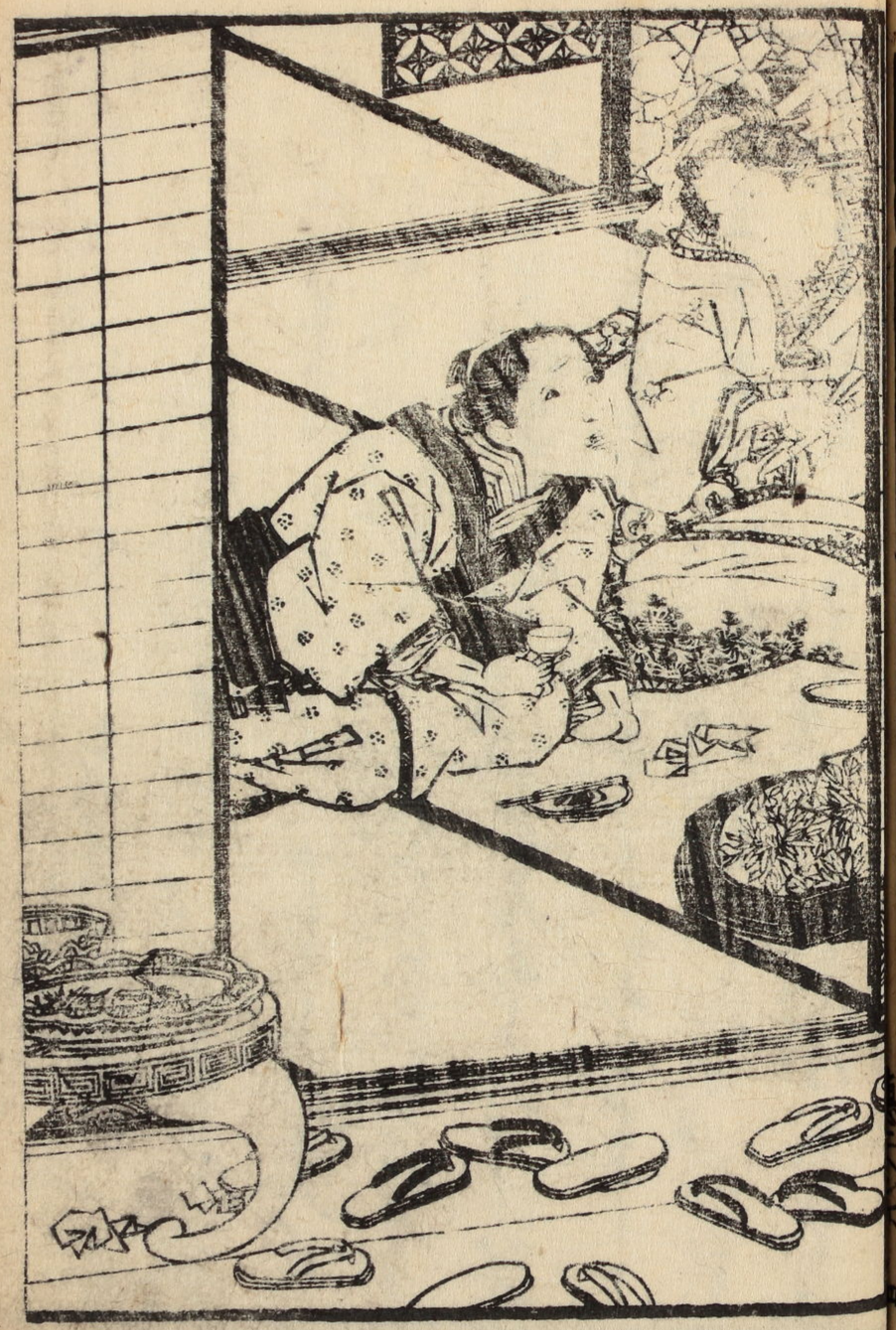
きませんハ　羽　ヲ　ゼザアまセ　里　ウまハ　脇中　せ　ものを
ちよハせるとらちがあきませんハ　羽　ヲ　ヤ　ウん　わさう
ざまは子へ牛とのふ字ふまたべようざまとさ白へ
栄　ヲヤ〳〵牛ハまかのろ〳〵〳〵ぬるぢやアあり
きませんろ賀ととのふ字の方がようざまは　栄　ウん
とうふ賀がいっち早うざんむハ　羽　アハ〳〵ありの
てあん　白ごごど豆もく〳〵ようくそろろく白のヲ
ろのいちどうふ　ヲ　ホ〳〵〳〵アハ〳〵

ろのうる　何　栄　何とのふ字をうのく
はは右のごとく　羽　ものを
るヨ白ごいふまと流れとぞうるたろもを
があどけ白くてもうろうるぞ
栄　羽さん　いもあげ中まはヨアせろ稲へあんまり笑ろ
とうばくるのくトもをさる　羽　サアくよとうと
くトちろくを　栄　とる　ヤトきを　つ稲　アイト　砂を
る　羽　ウ里さんハ勝ざうるよびみせろくん
栄　ちうろざうが居ざ白はよ　里　ハいんどうきませう

糸「さういつく　ぜんぜんな　星「アイそをてどやアかうつ
だうどんをよとくこんな　とのぎく　とるとアレサ式蔵さん　きまけ　妙
どんわさういつく　菊「アイトぜん　菊「こんな
栄さんちつとうそさをうよ　身わしこを　鶴人　唄女　元ごョ
栄「ヨヤさうぐございまさ　げびざう　卑狗の　方へ　身わ　あを
まつこちつ。活業こまぬくでもわつねぢやアらけませ
ん子　菊「どもわョウ　糸「栄さんとまるョ　栄「ちいこん　内兎
みたいまつこョ　菊「こんなア　栄「ハイ小トいわきこをこをこへ　をちるぐこつぐのまへ

うけ　ざ　をもつくこる　菊「栄こうこをいさう　深こぬるの
栄「さうこをまさうへ　菊「こちうおきなくこわこをつけく
のうけ　ま　栄「ハイこちうい　ち　傷さんが　来てこう
ちづめませうさういへバ　今　けさ　軽いまど　一度も　糸　兵を　見
ませんョ　菊「いまこが　糸　臭を　見こくぬまべいてぢやア　稼へう
栄「ハレいろさんのまぐございまさアなこへ　菊「こんな
栄さんまこちつとも　楽　らく　を　高ようこと　ちんこく　三味線
のことハこをまてこそうわ　ぬ　居るョマア　内　ないで　ちつと

青円楼よ
藤兵衛
遊興汰
寿ぶ



ぐん
弾ヨ　栄　そもじやアマアちろと弾ませう　糸　ナゼ
まことそんなふ弾せとぐんなんをヨ　花　さうぢやアあり
ませんが栄さんふ高慢さーえやらとおもつく
ざまをヨ　栄　にのまる　山花さん　ごしん　伝切ございまをまへト
いひなぐら調子を合る　あせ　山星　栄さんあつぶつけぢや
アあんまりざまをしらげんをしんなまーよ
栄　山星さんなんざいまをく　星　なんでもいヨ　花　栄さう
ぐうてきふいぢめらまるの　栄　どうも流行まをしらこ子

花　そもじでもいらう　糸　あんまりこまぢまいらう　栄　ヲヤ
おいらんまであんなことを　花　栄さうおぢく居さろ
ーヨ　栄　あもじまして　星　ヲヤ　花さん姫ぢざまをヨ　花　おろ
ぢんも大きふ　もせろ　もうやきもちとのふりまであた
ひどころのことをいろくうんぢてよこ
うな　栄　なんでもいらぢめるさいヨウトとるくうろつて
ぬるちふぐのーや
もろもろのところへ参る　ろ　どめんなさいまして　ト　つぎの引のあつぢをまづ
ふあけ
星　もろぢんろちへ参る　ヨヤ　花さん　今日八四遍　とんちどーろう
おいらんありぢろう　花　もろぢんなさうわろくく参

のだぼうぐ　ねうろこぜ　糸　おいらん（ありがとうございます　ヨヤ　おいらん　ありがとうございます　ヨヤ　栄さんいま　栄　おまえ　うるさん　撥ふまつく　居ヨ　今　ケサ　ハ　一度も　おまえ　会ろう　さ子へ　ろ　アーとちきさう　思つくヨ　栄　おまえの　来るのをまつくねころまで　ろまで　ろ　きうえ　栄　ぢ　ある　ア　栄　アそりや　アちがハ子　ろ　ちよいと　出ず　して　来ようろ子ト　ちせんを　とりふ　栄　ナニ　おろざん　栄　ろ　のいのいうをでぜ　老角　栄　ろ　ハ　ちがぢ

て　今まぐぢるけく　居ろうんざ。喃　ヨヤ　栄　うそをおつきるさいまし　栄　イヤ　栄さんのいろ　ちるとりでざまぢ　ハ　ちがいろさうろても　三　味線ふをとける　ぢ　出るいろ　ぢ　ろうざんまハ　ぢ　角人ぢのろけきしやろうと　思ふのハ　栄　さうぢやア　ありませんハ子ぢるけるヨ　ろうふ　ろ　ろ　ハ　ろ　の来るのをまつく　居ろうんざ　ぢざいまさアる　栄　ヘン　うまくいつぜ　ろ　サア　栄　きんちよいとどうまうぢんとも

中さまをせんぢへトさいぜんを　栄
ヲヤくおろさん
ヨちきやアまさ仲ゐるをよくする方がいとおろて
そるさんふいぢめらまをうぐくも結く居てあげさのお
ろ〳〵まとふ店さんせろトいひうぐく調子を合もる
栄八もてうくをあらせるぐう　栄
〳〵おろさんのあ
ぐくまる時ぢくの八物つく居てろ〳〵
内面ゆハぐまも居るのヨ若且那ぢりトいつく栄
八の奥をえる　栄
〳〵うくトおふくろぬあいさろひ

ハの中でハ。よウくゐ若且那のつををこぐるヨもろ。
お揚も品の中で。よウくゐのおよの粒子を栄こぐる
ヨもう稲〳〵

○栄八ハ丹次郎と情通あまびすやお揚ぐ
ヨりぐでくゐりまもろうと音をつけぬるわ
丹次郎ハ少くもその意うるまどもろハ丹
次郎ハ御くゐとぞと新ひくをまど
栄八とのハ粒子あまびろくふでぎぐく

京のうるはぬひよりいつも茶八を拵こむ
ものあり右ハ志ゑもん二人のひの。好自ハ
看官実ハとゞ茶ーぬく
とゞまハさて、きき茶八ハ縞ハ綱子を合せ〳〵お宝りの産
付振ゆるハいろ〳〵のいろ〳〵を産の実ハ八人情をし
ぐ〳〵とゞまバ器〳〵ゝ茶ゑ〳〵ばと豆ゝり二三日ゑ〳〵塩ゝかの
氏系ゞ産の中の茶ハいろんと茶八二人のさ〳〵ゆひ
ゑゆうゑ〳〵と和袋茶と豆ゝやアいろんそのつも

りハ志ゑ沢ヨ茶一さうサさうしゐよその外の茶ハ志
と紀ゝさ豆振ゆるゑ。ゆうあんゆり産茶へまて
ハゑりのヨ茶アイ和〳〵てをり志ゑまゞ今の肉ハの
けゑゞゞのよう〳〵和ゞそのゑゆをゑゞさ豆ゞゆゑと
のゑうおゑまへさんハゆる利豆豆へんゞゑう今の中斗の
ゞと思ゑと茶産をし〳〵ゝ心の下ゑうんゞゑ知細ハゆう
ゞゑりませんトゑゝ濃ゞむ氏系ゆ眼の中ゝゝ
うゑゑん茶ハんハとゑうのハ編ゞゑ姉妹のゆうハ思ハ豆ゝ

そんなるを　をかまへがいふとおいらまるんぐ　弱く
なるヨマアノ　ヘ　ひが　成就　まるまぐいらるるぐ　地ふけ
どうまるまるさんなヨ　糸　おいらん　死てまるまるまるまるいて
ませんヨ　糸　トいつまくいち長さんも今いふ通りのまるぐ
うそのまるぐ　糸　そまるまるよウく合点して居まるよ
糸　サアノ　ヘ　まるヨ　糸　アイト　紙　ヘ　真を拭く
まるちよいと　ひを　突く　ヘ　糸　ヘ　ヘ　ヘ

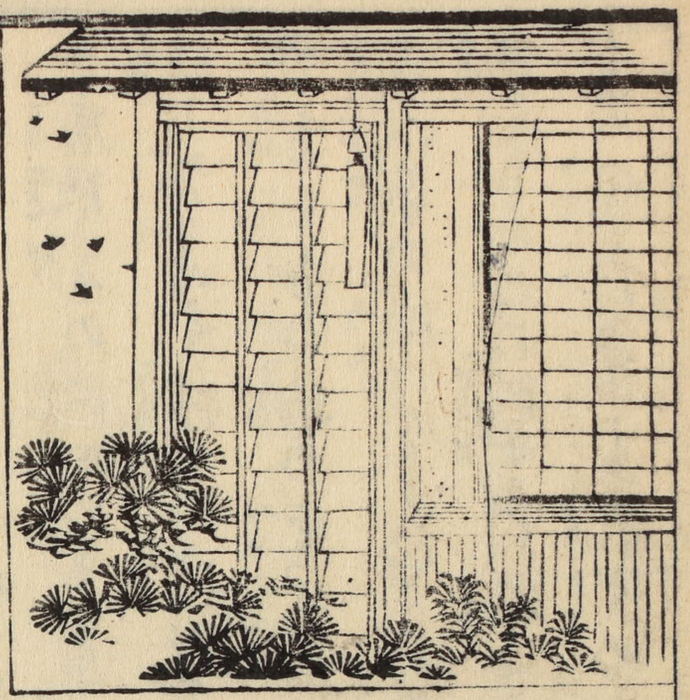
うゝどんをふ酒をゝぐさ志ッてもよく世話をゝてくれる
さゝ志ゆるゝ何ま書ごハるのヨ 糸「さゝうでございまスよ
一さいアノ変装の着ハるんを絵書めゝごゝでございまスよ
てきアノ落葉さんとゆゝもいゝ女郎花ゝゝありまス絵
糸「さゝうサてまでゝゝきぐふ絵をうのく軽んでゆゝく
おゝうゝと思ゝく居るのサてまゆ茂さんが喜びゝく性て
せゝとふゆるゝゝゆんでゝらくゝ、あけゆんゝとゝゝ
ゝゝ茂さんが志ゆまふ紙へと烟草へをゝんを封ふこし

らくゝゆらゝとゝゝゝ志ッゝゝるゝん初を学ふ出
ゝゝ出ゝりゝ三の桐を付さッ志ゆまさゝうゝゝきん歌
茂さんふさゝいゝくあげヤさゝう自 糸「そゝこらやアイ何
ゝふゝけゝマアまさ志ッゝゝ中の町ゝゝ小生ゝさゝ移
ハぢやアいけませんヨ 糸「さゝうサマアゆゆハとまゝゝとこゝめく
ハゝゝくをゝりゆヨ。ワイオゆゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
節ゝゝあいさゝうゝゝ役ゆゝハ茂さんごヨ。そまでゝゝ二階のト
とゝゝを 糸「提灯ゝ居ゝゆのゝゝ下宿さゝゆゝをゝゝのゆも

いて。この場とのふハ幕りあれば新家をさーこくいかことぞうり
たまこうこうふ幕りあれば　ゆどくさぐりあると
ゆうへ　「わんとうふのうわりぐさ　くーくー　私やアえん
の国果ぐこんみふおまそんふ若労をうけるのこそうべ
茂さんわも幕えづうしのるゆだりとうで塩丑してお
くんみさいョ　「そりやア宮初うう見物をして居るゆ
ざアゆ　マアく　首尾よくゆめぐいつこるそのの時さんと
礼をいひるまく　マアをまでばくこぐへの物ふ　「そん
ゆうへ　「ゆくいきみョ

第十二回

こひ　恋ふ幕もせを上京町うの米八八氏日氏男ひぐけゆ
き　唐琴屋の内所のゆめふ氏糸とたりくーうゆも糸
後ふうりゆく浮世の定めるきものくを衣を身一ツふ
せる方もるき物の雲春の物の多八歌ちのんで来る
商人京の源次をまひまバ義太の二階いうる人の
物ぎきぐこの氏世ゆ級こりー宮古路ぶーの情死
ゆの語ゆ　さーう語賀の一曲加賀八ちゆ中ゆて



落をとゝる幾とん場
その淨瑠璃八方の通り

○吉原後
掛八まきとゝ掛ふとゝ掛八ふとゝ

まぎこたりとまつ寄うらぶうまそうぶうまそうぶ花を
みやうしの嵐山千本の花の上を四く名も
言傳屋の花後小を押切二挺三 中果
いとぎんやる言傳八けの与言ゞたまづさの
とくふとうまの沒ぬ袖のうち縁をさるとゝ
沒ぬ。ゑんぞ姫さのあつてのことゝたゞしあの
その長こうの紙八よめゞるよめゝねるこゝろ
のうぞの業ゞらを三る産者さのらうそく

白波ハ世ことゝゝえ立ぬ所ハ与吉ハ奥も世
繁もそゝげてうつりとさも義ときるその風
情を主とゝゝるより言ふ所ハ此の関の根ゝ
茅ゝ者ゝを付うつ浦うつとゝゝゝゝゝゝ今
さらにいつでのもりの岩ゝゝゝのもるゝ
ひとゝゝゝけり

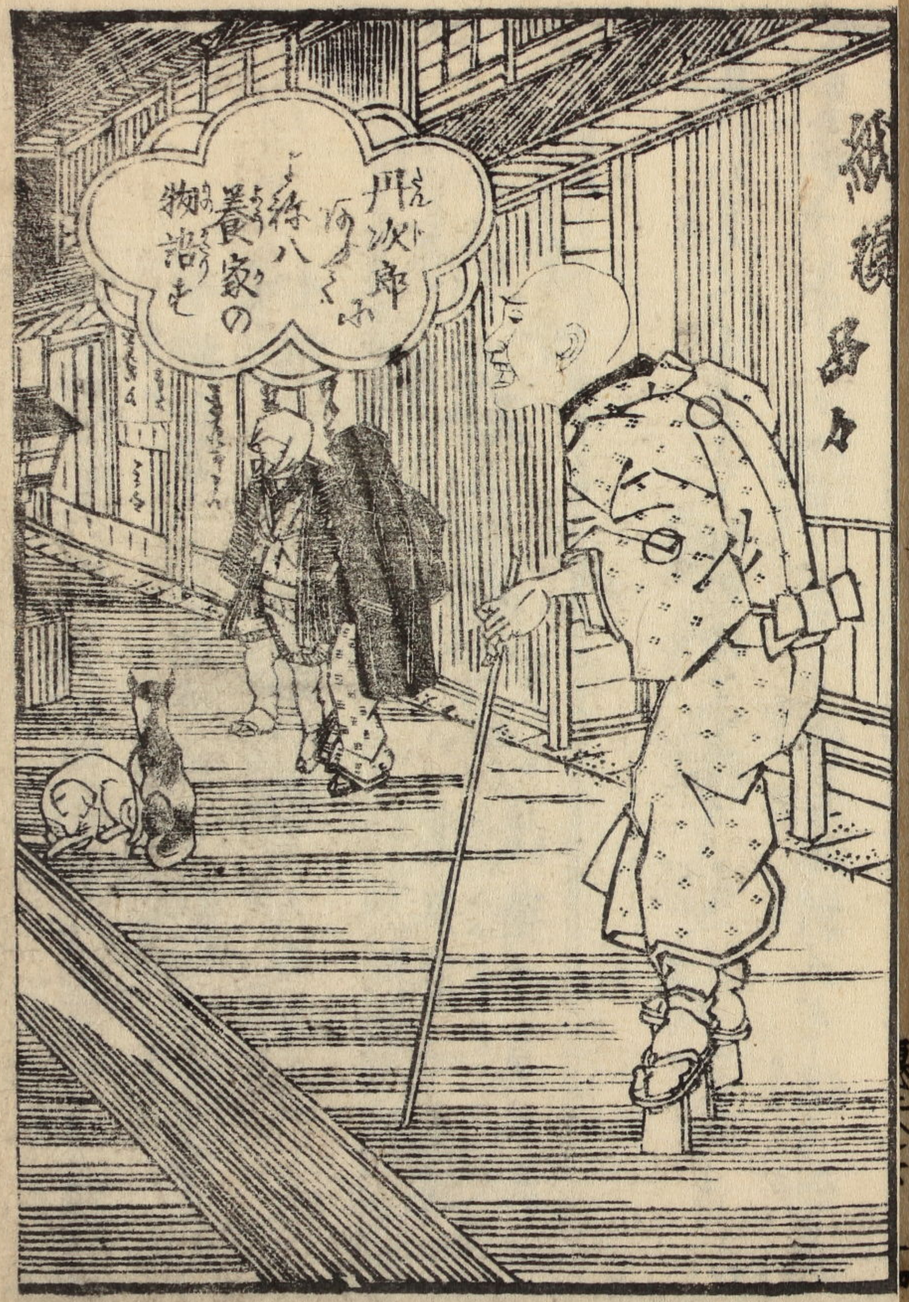
同　文字大夫
宮古路豊後掾
同　綱大夫
三味線　岸沢三五郎

高崎与吉　契情吉原筏

大字七ゝぢり
けいゝぢん

正本所
元大伝町
いづや勘右衛門

國
上
雜
路次五時度々初


門次郎
ものくふ
よ将八
養家の
物語を

語賀加賀八のことめかゑで右の浄瑠理
を按ずるに中形の絵入本として
出板いまだ外題八則ち左の如し

流行
光小紋合
しき句を撰
春色花いろは
全六冊
萬永春水著述
渓齋英泉画圖

栄八ハ主とぢまりくゝ心の中ハ獨り言
ありやアこりゃ加賀八ぎんが俗者ハ杉んぐ俗り申さ
と喝のあるこ言葉代とやゝごきうじゃ。てゐんごうかゝ
しい人のるゝとふ思ふ主ハ申ハ主ハ申ハ主ハ申ハ

ちょっと今時さうし浄るりの手本とやうもうくとや
おもへばいらぬで出しゝくうりぐ爲
どうしてそんなふうをいの樂ふいおるまいまいしゝとのぐ
ごぎいまいまごこの宝のふ長もとろと二ツ長てうふ
ヲアアあまさへお出なさいみまへトつまを。長者の娘の声
かくせどく香梅ぐ長今ちりても行のまるの
中いろ抜つ人時ア今ぐ花時花まうぐふ
柳の新行ふそ爲も戸塚八と言田ぐ蜜

陰の美ふ歌のふどゝのそめふそまとと新ゝてまこ
まうの稲ぐをたどり来る
さても第八丹次郎八武蔵者ふる中稲の者の二ふねふ
いうりしぐ墓ゝ者内八長知りの長まづゝゝ二人ぐ
さしもうひ猫ふまぐりゝ中あぐゝゝ長ふるゝまゝ
ゝりける

こまいうるの長ゝ者唐琴屋の内ふ長ゝと
混紡ゝ小蝶の母親も病死ゝて支配人

兎毛氏の悪弟より丹次郎を他へ再嫁ふ
つゝ〳〵まづく家内ハ兎毛氏悪ふ
ばかりふ
ちゝ〳〵ひろぐ丹次郎ハ妻子ふ引くる先方も
黄訳女代の悪斗ふよりて忽ち妻ハ病上
まづ〳〵ちゝ〳〵ふりぬきあまつさへ丹次郎
の身ふ罪をきせまとまのびうくく加くふり
一一西氏元来おちつく欲性ふうきまつ
ゐまづ〳〵ふ囲窮狼狽〳〵唐琴屋へも

より〳〵まづ〳〵と詮方つきまへうこ目をうけ
上野町の裏ふ居りく伝ふ栄八を呼
出〳〵ふんとも〳〵訳ふ栄八ハ丹次郎を
案ずく此裏の人ふ軽ふ思ふ手ふ
ふんあふてへ居りく丹次郎ふハ〳〵
ふんまへ

栄 丁 若ごんまへ 丹 モウ 若ごんをとんぜ
ふんまへ 栄 アイ をまづ〳〵と若をとんぜ
若をとんぜとつく〳〵ぶつけるぶあるものゝ 栄 丁

ぢやアマアとまちつ名をいまよびやまさせうぐまこまつ
生えいおまそんハどうあまさるつめりぐあつつしやるのぐ久
丹「どうふも彩ゆまおやきの方の納金や欠落をしこ
やつつのことがまちつ極ハ中ハ世の中へ表向やまつ且つ百へと
いふものどつつ赤やうぐ百へどこぐ用金へでもマアしつくえ
やうヨ栄「アレサそんなひがをいことをおしひおさぐちやア
いけあいハ百へそまとりつ逆い訳ふおやまいヨまこまぐ
ぐ百ふやくつつ赤いとこまりまえアナそしてあぜ裏
子ふいつ赤ぐつあるもあくそんあふおあ金ぐあくあつく
おまそんの親戚ふあつえんぐありまえ百へ丹「そまぐ
どんくえあまを通りのことけぐぐえやくつへばおまぐぐま
さまとこのサ栄「そまでつてるそのまけが私やアさぐぐり
まとりませんハ子他のあこまとこつハおまえんのとぐふあつ
あいやつふいふまさつふものぐやアありませんつ丹「そまぐ
できるくまへあつふげるかんまるしく極ハナ栄「あぜあせふ
梅へいつこあまへト癒れあまこまてくぐ注くぐ展こりしぐや

ありく　栄「そもじやア子。エ丹さん　丹「ゑんざ　栄「アノ
あ〜この暖かどうぞてまでまくいおんなさいまし
丹「ナゼ　栄「ナニヲ今歌実あまさんわい見わかるとハ
ぞんじませんくく詮方がありませんトのひるぐう帯
のあひざのうちいさき金を二ツだうり紙ひもりしまつふ
丹次郎ホヒテ　栄「エあゝ〜こハ是非お合をしく
あげやうどうぞ田舎ゑんぞくのうるいやうゆく
おくんなさいヨトのハバ丹次郎ハのくくふつくく金をちらい
とのぐのふとろくのまるをバつく

栄「ヲヤゑんざ子へのぐのくサトのひるぐ〜まさとのかぎと
ゑりますぞやゑさざふむせバ　栄「丹さん　丹「エ　栄「さぞくやうぐゑせうう
おくんなさいヨ是非ひきぐどう
ゑりさまぢくトのふ新おつと丹次郎ハゑぐめく涙を
ぞうくく擦ひきとせる美きくとびひのふまぬ
実と誠そこハ倒まく法仏ゑるぐやあつく　丹「ふき
と思つさらうがゑ思しゑねヨ　栄「りんわんしゑ〜ゑ〜
ゑくトゆつこり笑ふゑぐの笑新ぢてぞんくく志

の花ことより後のものゞうハ摘ごとゝのハ茅
帝ふつゞりく先年より出言閲を拾ひあつめて
りへバこの巻始六冊を出一閲のうくいまゞ摘ごとのことを
はぞんドゝるき出方さるハ出ものあ拾ぶさることろ一
く言評を揚へとゝろのの

春色惠の花二編巻之下終

太真遺傳

精製桐の箱入

處女香

一廻り

とゝく

[illegible]

亀永春水精製

[illegible]

妙薬 初みゆるの丸

[illegible]

江戸京橋弥左衛門町裏側十番

書物絵入讀本所 文永堂 大嶋屋傳右衛門